

## 事例レポート ②

# 写真甲子園と 写真の町づくり



東川町

東川町は写真の町宣言をして、今年で24年目。国際的な写真賞・東川賞や国際写真フェスティバルによって町の知名度は少しずつ高まっていったが、写真甲子園の開催で知名度は一気に全国区になった。映像文化プロジェクトによる町づくり効果を顕在化する努力は続く。事務局をあずかる市川直樹写真の町課長に、取り組み内容と抱負をお聞きした。

### 写真甲子園が町づくりに弾みを

1985年に「写真の町」を宣言してから10年目の'94年に写真甲子園がスタートしました。東川町の写真の町として知名度は高まりつつありましたが、住民には写真の町がどういうことか分かりにくかったということもありました。そこで、写真の町としてもっとわかりやすい文化イベントで、かつ、次の若い世代が活躍できる場、目標となる大会をつくれないうことで、写真甲子園がスタートしました。

全国から選抜された高校生チームが夏に北海道に集まり、地域の風景や人々の営みを写真で切り撮っていく。大会の4日間、東川町、美瑛町、上富良野町の決められたエリアで3人1チームで組み写真を作り上げ、作品の良し悪しを審査するのです。今年は全国で252校が初戦を戦い、勝ち抜いた14校が東川町で7月末に行われる本戦出場を果たしました。4日間の戦いのうちファースト・ファイナル、2回の公開審査会が開かれ、参加チームのプレゼンテーションが行われます。プロの審査委員から厳しい指摘や評価をいただきます。

イベントには地元の高校生や住民がサポーターとし

て参加して、司会進行や食事の準備、ホームステイなどで大会を支えてくれます。

写真甲子園は、NHKや民放でも何回か取り上げられてきましたから、ご覧になった方も多いと思いますが、表彰式で優勝チームが発表される瞬間はやはり盛り上がります。一緒に戦い抜いたという気持ちが込み上げ、高校生たちみんなが抱き合って健闘をたたえ合う姿は、いつ見ても感動ものです。住民のサポーターも一緒になってその感動を分かち合う姿を見ると、写真の町が徐々に住民レベルにも根付いて来ると、本当にうれしくなります。

### 写真甲子園がもたらす効果

イベントが無事終わればそれで目的を達成したということにはなりません。最も期待しているのは、若い世代が次の映像作家や映像文化の担い手に育ってくれることです。過去の出場チームの中からはプロの写真家になった人も出てきていますし、映像関係の仕事に就いた人たちからの便りも寄せられています。写真甲子園の出場経験者があの感動を忘れられず、サポーターとして参加してくれています。写真甲子園の卒業生が写真映像産業の担い手と成長し、その人たちが東川町を第2の故郷と慕って帰ってきてくれる。そんな日が近い将来来ることを期待しています。

写真甲子園はマスコミで取り上げられるだけではありません。これまで、高校の美術教科書に入賞作品が掲載されたり、「写真の神様」(山崎由美作、岡井ハルコ絵)という漫画にもなりました。また、2008年には「キッズフォトグラファーが行く」という雑誌企画で東川の子供たちの写真が紹介されたり、'06年には女性のファッション雑誌企画で、現在活躍するプロの女性写真家たちがオール東川ロケで、有名モデルを使って1冊の写真集も発行されました。

東川町を写真の聖地として外部からいろいろな企画



写真甲子園に出場した高校生のみなさん

が持ち込まれ、評価されるようになることで、写真の町ということに対する町民の意識も随分高まってきたように思います。

### 写真の町づくりによる交流と文化遺産の活用

私が写真の町に直接関わるようになったのは2度目、3年前からです。これまで観光部門に入っていた「写真の町推進係」が'03年から特別対策室として、写真の町推進係と経済活性化係の2係で新たなスタートを切りました。写真の町で築いてきた20年間の財産・ネットワークを活用して、もっと目に見える形で町の活性化に結び付けていこうという狙いが町長にありました。

そのときに出来た商品が「米缶」です。東川町は「お米の町」でもあります。そこで、ほしのゆめを入れた缶詰をつくりました。東川産米一合がジュース缶に入っているというユニークさと「生米100%」の洒落を利かしたデザインが受けて、お土産や記念品のヒット商品に育ちました。これが導火線となり、町内で次々と新しいアイデアや新規事業に取り組みだしました。

次に出てきたのが、「君の椅子事業」です。「木工の町」として、子供の出生時に親御さんの思いを託した「君の椅子」をプレゼントするのです。旭川大学で学生さんたちが考えたアイデアを事業化したもので、この2年間で約100組の家族にプレゼントしました。

写真の町を切り口に出会った人たちの応援を受け、これまでになかった事業も次々と生まれました。例えば2年前から始めた「新・婚姻届」は、婚姻届の写しを写真とメッセージが書ける特注デザインの専用台紙に添えて新婚さんにプレゼントするものです。これは出生届けにも応用しています。そして、生後百日や傘寿といった人生の節目の記念にも写真を撮って、町内の木工業者が製作した木製額に入れてプレゼントしています。東川で育った子供たちは、夏休みの自由課題で「写真絵日記」として絵のかわりに写真を撮って貼り付け夏休みの思い出を発表します。

写真はいつでも記憶を呼び戻してくれる大切な財産です。役所の変哲のない事務が、写真の町ならではの事業に変わっています。東川町では、婚姻・出生、子供の成長過程とともに、親子・家族がそれぞれのライフステージで写真文化と共に育っていくのです。

文化ギャラリーでは、これまで、写真の町・東川賞の受賞作家から受賞の記念に写真作品を寄贈いただき、その数は2,000点を超えています。文化ギャラリーをプロの写真家の収蔵拠点にしようという話も出ていますが、全国の写真関係者も文化的価値の高い作品の

収蔵・保管場所の確保には頭を悩ませているのが現状のようです。

文化ギャラリーに収蔵している作家の中でも、既に他界された方もいらっしゃいますが、収蔵作品が作家が亡くなった後も展示されていくことになれば、作家みよりに尽きるのではないのでしょうか。文化ギャラリーの収蔵事業を通して、町と作家がつながり、文化遺産の拠点になり、それを将来も活用していく。これも世代を引き継ぐ文化事業に育っていくものと期待しています。

### 写真写りのいいまちを目指して

写真の町の理念の中には、写真写りのいい町づくり、人づくり、モノづくりをしようと謳われています。

2003年には「美しい風景を守り育てる条例」を制定して、開発事業に対してさまざまな指導ができるようになりました。この条例で美しい風景づくりに貢献した者を表彰しています。また、写真写りのいい町づくりを進めるため、地域活動の中で花を植えたり、自宅周りの環境整備を進める家庭も増えてきています。

写真の町としてさまざまな取り組みをしてきたことも誘因となって、クラフト陶芸作家、プロの写真家・本州からの移住者も増え、人口も僅かずつではありますが増加しています。

さらに、大雪山の麓という恵まれた環境であるため、水が非常に良質で、道内では唯一、東川町には上水道の施設がありません。全町民が各戸それぞれにホームポンプを設置してミネラル・ウオーターで生活を送っているのです。東川を代表する水として「大雪旭岳源水」がありますが、この水は、先般「平成の名水百選」にも選ばれました。良質な水はフィルム現像に不可欠です。特にモノクロ写真の現像には水が命だと聞きます。人間が生活を営み、農作物を育てる上でも、「水、空気、土」は無くてはならないものです。そんな自然環境、条件に恵まれ、交通アクセスが整った写真文化が息づく町であることを企業や来訪者にも積極的にアピールしています。

他の自治体にはない「写真」という特殊なチャンネルから、いろいろな情報やたくさんの応援をいただきながら、最近ようやくその効果が芽を出しつつあると実感しています。写真の町を宣言して四半世紀。今後、住んでいる住民自身が「写真の町」東川町で暮らしていることを〈誇り〉に思い、町の歴史を刻んでいく一人であることを実感できるような取り組みを進めたいと思っています。